

文献紹介

Lyle Jenkins (2000), *Biolinguistics : Exploring the Biology of Language*,
Cambridge University Press.

伊藤克敏

近年の言語学と生物学との関係についての研究は Lenneberg (1967) *Biological Foundations of Language* に端を発するといってもよからう。言語の生得論を唱えていたチョムスキーはレネバーグの研究に強い関心を示していたが、著者はチョムスキーの門下生でザルツブルグ大学やウィーン大学で教えており、1979年には彼が中心になって、ザルツブルグ大学で開催された L S A (米国言語学会) 夏季大会では *Biology and Language* というテーマが取り上げられた。筆者も偶々その大会に参加し、神経言語学者で知名の Harry Whitaker の講義を興味深く聴いた。1980年には著者が中心で Harvard Medical School Biolinguistics Group が結成され、脳生理学者の Norman Geschwind も加わった。

生物言語学の中心課題は次の5つであるとしている。

- (1) What constitutes knowledge of language?
Humboldt's problem
- (2) How is this knowledge acquired? Plato's

problem

- (3) How is this knowledge put to us?
- (4) What are the relevant mechanisms of language?
- (5) How does this knowledge evolve (in the species)?

言語は遺伝子に組み込まれたもので、習得されるのではなく遺伝子プログラムに沿って「成長 (grow)」する、という見解を取る。言語のタイプによって parameter-setting を行えば、後は自動的に言語習得は進むとする。複雑な言語構造を限られた不完全な言語資料 (poverty of stimulus) から帰納的に習得するのではない、とする ((2) のプラトンの問題)。

チョムスキーは反進化論者と Pinker & Bloom (1990) は決め付けているが、チョムスキーは条件付で淘汰 (selection) 説を認めている、とジェンキンは反論している。本書は internalist であるチョムスキー論への externalists からの批判に対する著者の反論が主体になっている。